

寺山はばたの廿三夜様

薄暮寺横の道路を海岸に向けて歩いて行くと、途中の左手に可なり勾配の強いコンクリートの階段が上の方まで続いているのが見られます。

此処はかつて「はばた道」と言つて、途中の坂道になる所は平たい自然石を敷き詰めて斜路を作り、階段を無くしてあり、南部藩の人たちには唯一海に出られる大事な道でした。

今は新しい道路が出来てから、道の役目を終えた道路敷きには植林がされて昔の面影はありませんが、当時道幅は五メートルほどあり、当時の村道から見ても大型の道路でした。

薄暮寺の横を通るこの古い道は、左側に線香の香りのする墓地、右側には椎の木やタブの木（タメの木）の古木が鬱蒼と枝を伸ばし、日の光の届かない古木の根元は、奇怪な形にくびれたりして、子供たちには寂しいところでした。

また右手の土手の奥には「六本木」と言つて何回伐倒しても芽生えて来た、タブの古木の株があり、其処には化け物が棲むと言われ、根株の周りには何段も石を積み重ねてあり、幼い頃これを見ないように走り抜けた記憶があります。

其処から道は下りの階段になっていて、其の両脇に石碑が建てられていました。

廃道になった今は、新しい道のコンクリートの階段を登ると、旧道は閉鎖されていて、石碑のある辺りは昔の姿を残しています。

登りきる右手に大型の「廿三夜得大勢至菩薩」と刻まれた石碑が、両脇に石燈籠を据え、右側には「説阿弥陀経」と「諸国巡礼供養塔」の二基が並んでいます。

また此処から一段下がる平地の奥には、大きい石室に納められた地藏菩薩の石像が見えます、廿三夜の石碑と向き合う左手の囲いには、これも石室に納められた地藏菩薩の石像が祀られ、其の脇に猿田彦大神と刻んだ道祖神の石碑も見えます。

なお以前此処には、「大六天之塔」と刻まれた石碑が据えられていました、これは神津島港上の「大六殿」と呼ばれるところにありましたが、昭和四年（西暦一九二九年）の二月に、此処に忠魂碑を建てる事になり、其処の地名の元の「大六天之塔」の石碑をこのはばたに移したものです。然し戦後この忠魂碑が取り払われてから、この「大六天之塔」の石碑は元の場所に移されていません。

「廿三夜得大勢至菩薩」の石碑は、この「はばた」と「秩父山」「横道」それに開発センター上の道路わきの四ヶ所で見ることが出来ます。

島では旧暦の一月の廿三日を「三夜待ち」と言つて講を行っていたようです、私の祖母が（今晚は

三夜待ちだ」と夕方に出掛けるのを、見送った覚えがあります。

「廿三夜待ち」は女性中心の講で、子育てと安産を祈願したと言ひ、此れは月待ち行事でした。古くは「月天子」を、夜を支配した「月読みの命」、それに「勢至菩薩」を神としていたようですが、本来は月そのものを神として居た者と言ひます。

話を元に戻してこの道路の道幅が広いのは、文化三年（西暦一八〇四年）に瀨音寺の伽藍建築の際、この道路を利用して伊豆辺りからの建築材の搬入をしたためと考えられます。

当然の事ながら其の頃の運搬手段は総て人肩で運んだので、道路の道幅は必要であつたと思ひます。

この「廿三夜得大勢至菩薩」の石碑の裏に細い山道がありました、その道は神津島港の見える場所、お寺の住職が「今日の漁模様は」と港での人の動きを見たところと言われ、「坊主山見」と言われていました、お寺の住職も島の人たちの暮らしを思い、漁の模様と人々の動きを見詰めていたと思ひます。